

海外便り

## エチオピア通信 (3)

中山 実

## 1. はじめに

東アフリカに位置するエチオピアにおいても、アジスアベバ市内中心部をはじめとして、以前に増して多数の警察官が街頭における警邏・警戒活動等を行うなど、テロに対する警戒レベルが高まっています。在エチオピア日本国大使館からは、万一の場合に備えて、備蓄品として10日分の食料品、ミネラルウォーター、常備薬、簡易こんろ等の点検の実施を心がけるよう呼びかけられています。それにも増して、現在、エチオピアでは、大変な水不足による計画停電が行われています。週2回の計画停電（我が家では火曜日と金曜日）が午前6時より午後7時ぐらいまで行われています。スイッチをオンにすればいつでも電気が利用できる日本をかなり懐かしく感じています。この停電は、昨年の雨量が例年に比べてかなり少なかった影響でありまして、テレビの特別番組で現在の深刻な状況を報告しています。映し出されるダムは、本当に深刻で、元湖底には、草が生い茂り、もう無くなる寸前となっています。このまま雨が降らなければ、停電時間が午後10時まで延ばされ、加えて飲み水等の供給にも影響が出るとの事です。あとは、祈れるもの全てに祈るといった感じです。7月から9月まで雨季に突入するので、期待したいです。

## 2. 「そうは言ってもエチオピア人は頑固である」

さて、前回の本コーナーでプロジェクトを進める上で経験したエチオピアの文化を報告させて頂きましたが、今回はエチオピア人の気質について触れてみたいと思います。

「エチオピア人は、アフリカの中でもプライドが際立って高い」という話をよく聞きます。この言葉の重みは、プロジェクトが進むにつれて、重くのしかかってきました。この背景には、これまで欧米等の国の侵略から独立を守ってきた国としてのプライドがあるらしいです（正確には、

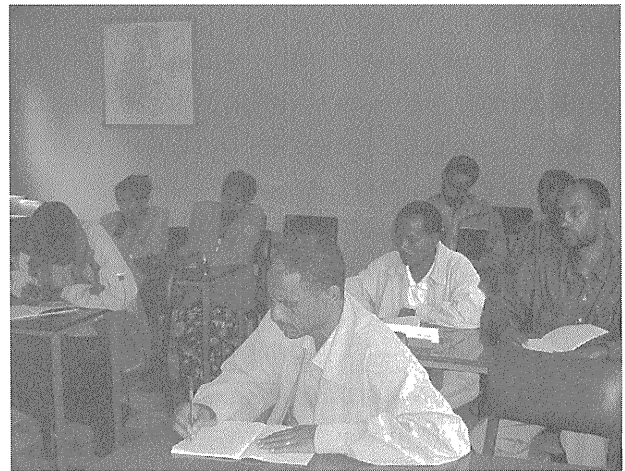


写真-1 ある日の講習風景（基本的に彼らは真面目に講習を受ける）

1936年5月首都アジスアベバが1935年10月から始まった第二次イタリア・エチオピア戦争によって陥落し、1941年5月までの5年間イタリアに併合されています）。

プロジェクトを進める上で、「この方法が良いよ」「このやり方は間違っているよ」とアドバイスをしてもらっても彼らは自分が正しいとして頑に私からのアドバイスを認めません。単純に、彼らは、自分の能力に絶対的な自信を持っているのです。勿論、考え方、やり方の違いと言うのは、日本人においても、違う事が多々ありますし、前回の報告より、エチオピアにはエチオピアのやり方があると考えれば、ある意味頑固さがあっても良いと思うのですが、自分の考え方に固執しているだけでは、その頑固さを認める事は出来ません。

ある日、カウンターパートが、「日本から来た建設機械が壊れているから、直してくれ」と私に陳情に来たのです。私は、機械の不具合を直す事の出来る専門家ではないのですが、「エチオピアなんかで直すのはどうしたら良いのだろう。機械の修理を担当する専門家は大変だろうなあ」と

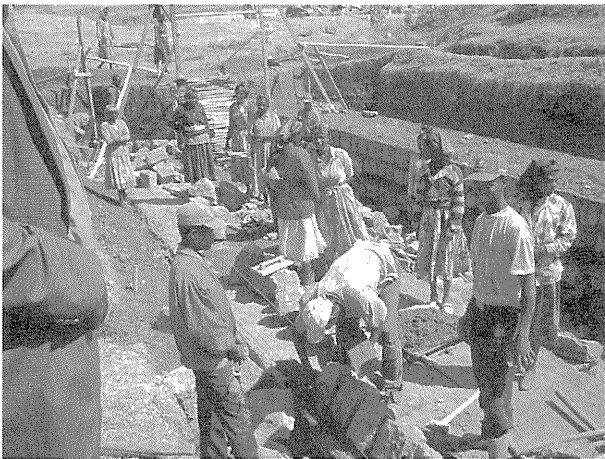


写真-2 ある日の実習風景（真面目に説明に聞き入っている）

他人事と思えずに不安な気持ちになっていました。

その後、私の担当分野の応援のために来られていた短期専門家（品質管理専門）の方と相談したところ、機械に原因があるのではなく、水頭差に原因がある事が分かりました。アジスアベバは標高2,000 m以上の高地であるため、気圧が低く、設計通りの圧力が動力部に掛からないということのようです（正確な理解ではありませんので悪しからずご了承下さい）。そこで、彼らに、「機械の故障が原因ではなく、水頭差なので……」と説明を行いました。しかしながら、彼らはそんな事を認めません。あくまでも機械が故障しているの一点張りです。そこから、彼らを納得させるための説明の長い旅路が始まりました。例え、人為的に足りない分の圧力を掛けることによって機械が自分たちの目の前で問題なく動いても彼らは認めないのですから。

本ケースは、原因が機械工学の基礎的な事柄であるにしても、誰しもがすぐに理解できることでもないで、別に機械が動けば問題は解決していると理解すれば良いと思うのですが、彼らはその解決を受け入れません。受け入れないどころか、機械の故障なので日本側で何とかするべきだと言う始末です。まあ、私としては、いくら彼らがわめいたとしても、結果的に機械が問題なく動くので気にしなかったのですが、このように彼らの頑固さは、我々が一般的に理解している頑固さとは少し違った頑固さです。



写真一三 橋の建設風景（本文とは関係ありませんが、どことなくのどかです）

違った例を挙げますが、私は、カウンターパートと共同で教科書を作成しています。基本的にエチオピア人は英語が話せるのですが、良く聞くと文法はめっちゃくちゃです。そのため、英語の苦手な私には、うまく創造力を働かすこ

とができずに、彼らとの会話にかなりの労力を費やします。もちろん、私の英語力にも大きな問題はあります。

教科書作成時での出来事です。私は、教科書の中で“spread”という単語を使用していたのですが、カウンターパートは、“この単語は、spreadedだ”と譲りません。皆さん辞書で調べられたらおわかりと思うのですが、この単語は、過去・過去分詞も原形に変化が無く“spread”が使われます。辞書を見せて“ed”はいらないと言っても、“君の辞書が間違っているのでは”と言って聞きません。頑なに“spreaded”を使います。「私が正しく、辞書が間違っている」という議論をされると、なす術が見当たりません。

この件でアメリカ人の友人と話したのですが、彼が私にエチオピア人についてこんな事を言っていました。「あまり、心配しなくても良いよ。君が任務を終えて日本に帰った後、彼らは必ず君のアドバイスを実行するから。“spreaded”も“spread”に書きなおすよ。もちろん、技術的な君のアドバイスも教科書に書き込むだろう。彼らは、君に技術で負けている事を理解しているから、その他の勝っていると思う英語では優位に立ちたいのだよ。だから、聞かないんだよ。英語が彼らよりも優れていなくて良いんだよ。心理学的にもこれで君とエチオピア人のバランスが取れているんだからね。けど、心配しなくても良いよ。アメリカ人の私から見て、エチオピア人の英語力は、会話は70%程度のレベルで、書く事は30%ぐらいのレベルだと思う。日本人はエチオピア人とは逆に、書くレベルは高いと思うよ。理由は、個々の国の教育システム、経験、英語との接する機会の違いがそうさせるんだから」

このアメリカ人の友人は、国連に勤めていて、長年アフリカ、特にエチオピアに携わってきたという経験があります。そんな彼が言うのですから、現在では、私自身、まあ、気長にやっ行って行こうかなあという気持ちになりました。

### 3. 「技術移転」って？

機械ならびに英語に関する以上のようなやりとりの中で、我々がこのプロジェクトで求められている「技術移転」とは何をすれば達成されたことになるのかということに近頃では考えています。

次回は、“技術移転とは何か”と題して私が思うところを書きたいと考えております。では、次回をお楽しみに。